

第2節 丁字形利器とその系譜

鈴木 一有

はじめに

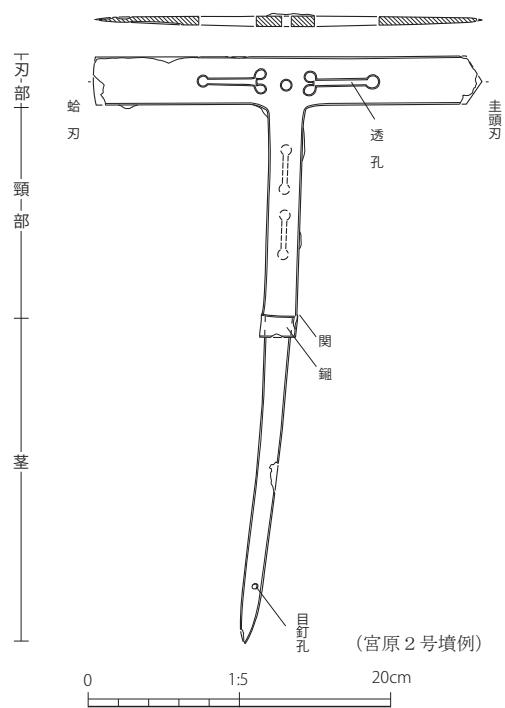
東平1号墳は静岡県富士市に築かれた直径13mの円墳であり、無袖横穴式石室の床面から鉄刀、鉄鎌、刀子、馬具、須恵器とともに、丁字形利器が出土した。丁字形利器は、その特異な形状から古くから注目を集めていたが、類例が極めて少ないとから、現時点に至るまで明確な位置づけがなされているとはいいがたい。本稿では、この特異な利器の系譜を東北アジア地域^(註1)に求め、その出現過程について考究するとともに、関連が想定できる資料を取り上げて、その分布と性格にかかる展望を示したい。

1 丁字形利器の発見史と認識

1922年、静岡県沼津市宮原2号墳の出土遺物（第64図）が『考古学雑誌』誌上に紹介されることによって（鈴木・後藤1922）、丁字形利器の存在が広く知られるようになった。宮原2号墳は直径10m程度の小規模古墳で横穴式石室を内包したものであったらしい。組合式箱形石棺の部材が残り、共伴遺物として金属製壺鑑や環状鏡板巻、鉄鎌、須恵器などが知られている。後藤守一は宮原2号墳の報告において、この特異な鉄器を形態的特徴から「丁字形利器」と名づけ、実測図を付して詳細な記述を残している。丁字形利器には、刃があり、茎構造をもつことから、長柄を備える武器の一種と捉えられたが、その異様な形状からその実用性については当初から疑問が呈されていた。後藤はこの利器の身部に毛抜形の透孔があることに注目した。太刀に用いられる毛抜形透孔と同様に考えるとすれば、この遺物も平安時代以降に降る可能性を考慮しつつ、結論的には、古墳からの出土品であること、共伴遺物の年代観との整合性を保つ必要性があることから、同墳出土の丁字形利器を「古墳末期」の中に位置づけてよいことを示した。この見解は1930年に刊行された『静岡県史』（静岡県1930）や、1941年に末永雅雄によって著された『日本上代の武器』（末永1941）、当地における

る地域研究の第一人者である小野真一の論考（小野1957）の中でも繰り返し踏襲され、定説的に受けとめられていった。

宮原2号墳例の報告以降、膨大な発掘調査事例が日本列島内に蓄積されたが丁字形利器の類例は増えず、しばらく学会の中でも例外的な存在として扱われていた。しかし、1989年になって、東平1号墳から類例が出土するおよび、再び脚光を浴びることとなった。静岡県では、おりしも新版『静岡県史』の刊行が企画されている最中であり、日本列島内でも特異な利器が県内東部の古墳に集中することが注目され、多くの県内研究者がこの古墳の調査や出土品の初期整理にかかわった。東平1号墳の調査成果については、現地調査後、すみやかに概報が作成され、丁字形利器の詳細な実測図と観察所見が示されている（久松・平林1990）。同書には、宮原2号墳例の再実測図も掲載され、片方が蛤刃、もう一方が圭頭刃である共通性が明確にされた。こうした詳細な観察を通じ、丁字形利器は、槍状の柄を備え、目標物を叩き割る、もしくは斬ち切る機能を備えた武



第64図 丁字形利器と部分名称

器であり、共伴遺物からその副葬時期は7世紀前葉から中葉であることが示された。

その後、1995年になって宮城県の多賀城跡から全国3例目となる丁字形利器が出土した。静岡県内出土の2例に加えて遠く東北の地から類例が出土したことによって、その分布域が大きく広がった。丁字形利器が出土した遺構は、鍛冶炉を備える堅穴建物跡であり、鉄器生産にかかわる鍛冶工房と捉えられている（新藤ほか1996）。この堅穴建物は共伴遺物から8世紀末から9世紀初頭の年代が与えられている。いっぽう、この遺構から出土した丁字形利器については、地金として集められたものである可能性があり、その詳しい年代を示すことは難しい。丁字形利器の特徴は、先に知られていた2例と基本的に共通し、東北地方で出土したことを考慮すると、この種の製品が日本列島内の広域に流通していたことが想定できるようになった。

多賀城跡において類例が出土した翌年、1996年には兵庫県美方郡香美町に所在する月岡下古墳の発掘調査においても丁字形利器が出土した。近畿地方での確認によって、分布圏についても西に大きく広がり、丁字形利器の性格づけについても日本列島全域の様相を視野に入れて検討すべきことを伝える発見であった。しかし、出土の経緯が部分的な確認調査によるものであったため、出土情報が速やかに公開されず、その存在が学会の中で広く共有される状況には至らなかった^(註2)。

1922年の宮原2号墳例の資料紹介から60年以上の空白期間を経て、1989～1996年の間に矢継ぎ早に3例が新たに知られることになったが、丁字形利器そのものの認識が深化するには至っていない。出土例が増えたとはいえ、現在までに知られている製品が僅か4点で、類例が極めて少ない遺物であること、その特異な形状から明確な系譜を示すことが難しいこと、などがその理由であろう。『沼津市史』の作成にあたり、宮原2号墳について触れた滝沢誠も、実用利器としては華奢なつくりに加え、透孔をもつ独特の形状、長い柄部や茎の特徴から判断して、実用武器というよりも儀仗としての性格を見出す見解を示しているが（滝沢2002）、それ以上の認識を見据えた研究はなされていない。

2 丁字形利器の形態的特徴とその起源

現在までに知られている丁字形利器を第65図に示す。4点ともに共通する属性として、以下のようない特徴があげられる。

- ① 刃部と柄部、茎に分かれれる。
- ② 刃部と柄部は一体であり、段闊を経て茎に至る
- ③ 刃部は双方にあり、蛤刃と圭頭刃に分かれれる
- ④ 幾何学的な透孔をもつ
- ⑤ 鐘をもつ事例がある
- ⑥ 長い茎をもつ事例がある
- ⑦ 全体として華奢なつくりである

これらの特徴から判断すると、丁字形利器は斧状の刃部をもち、長柄が伴う武器形の儀器であると説明できよう。また、日本列島内の器物に直接的な系譜が求められないことから、中国や朝鮮からの影響のもと当地に導入されたものであると捉えられる。これら共通した特徴を考慮しつつ、丁字形利器を二つのグループに分類する。以下にその特徴を示す。

1類：刃部の幅が双方で異なるもの

鐘をもたない

透孔は細長方形や三角形を基本とする

2類：刃部の幅が双方で変わらないもの

鐘をもつ

透孔は細長方形と円形が組み合う

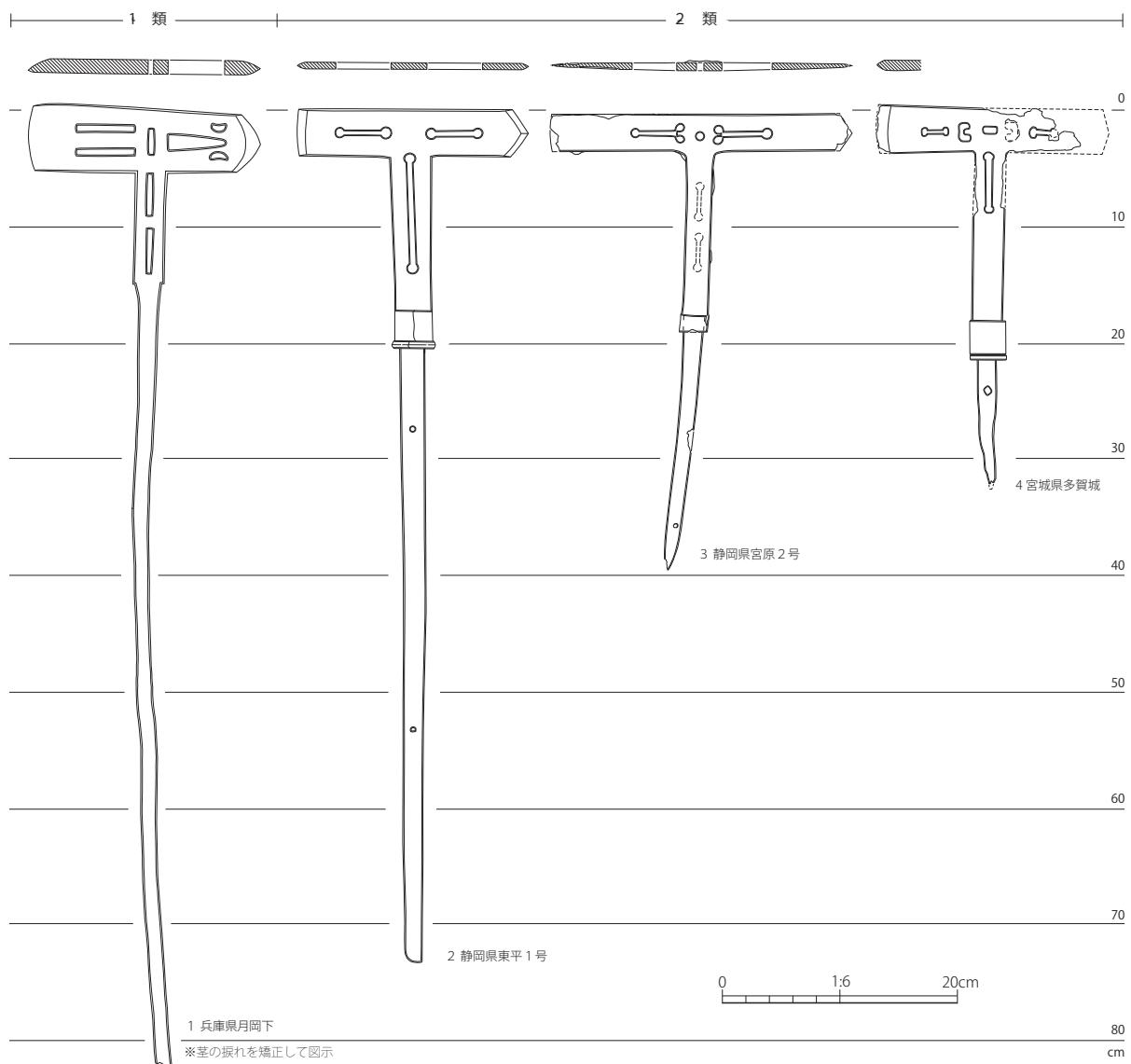
1類は月岡下古墳例が、2類は東平1号墳例、宮原2号墳例、多賀城例が相当する。共伴遺物の特徴を考慮すると1類が古相を示し、2類が新相を示しているといえるだろう。共伴する須恵器から導き出せる年代観としては、1類がTK209型式新相期、2類が飛鳥I期後半から飛鳥II期と整理できる。東平1号墳例の時期については、共伴遺物から導き出せる飛鳥II期を中心とした段階に求めることが妥当である。いずれも7世紀前半代を中心とした年代観が与えられる。純粹に型式学的な観点から新古を考えるとすれば、1類から2類への推移に加え、茎の短小化、頸部の伸長化などが新しい時期の傾向として指摘しうる。

丁字形利器を特徴づける属性の一つとして、刃部と柄部に施される透孔があげられる。1類では、長方形、三角形、勾玉形があり、2類では、勾玉形、円形、円形と方形の組み合わせがみられる。これら

幾何学的模様は、一見、突飛なように見えるが、長方形や円形、三角形といった形状は、刀の鍔や鉢にみられる造形と共に通する。勾玉形透孔についても、単葉文の透かし彫り模様を祖形として考えれば、刀の鍔に関連資料が認められる。これらのことから、丁字形利器にみられる透孔模様（特徴④）の多くは、鉄刀にみられる造形と共に通する、といえるだろう。丁字形利器2類は鉢を備える（特徴⑤）が、その形状が日本列島内でみられる鉄刀と共に通することも注目しうる。同じく、丁字形利器の茎に設けられた目釘の特徴も日本列島内で出土する鉄刀と酷似する。こうした特徴は、丁字形利器が日本列島内の鉄刀製作工人の手により製作された可能性を示唆するものといえるだろう。

鉄製の柄部を共づくりにする丁字形利器の形状はどのような製品に起源があるのだろうか。この問題を考えるにあたり注目できる鉄器が、中国や朝鮮半島の出土品に知られている（第66図）。桓仁五女山城の兵器庫（鉄器窖藏）や漣川瓠蘆古墳では、柄穴をもつ薄手の斧本体に鉄製の柄が装着された鉄器が出土している。これらの製品は、鉄製の柄に段をもつ関と茎がつくり出されている。丁字形利器の特徴①、②との関連性が高く、その祖形とみてよいだろう。これらの鉄器は、其の帰属時期は、共伴する資料から判断して、6世紀代と捉えられる。

この他、同じ五女山城の兵器庫からは、柄穴を備え両端に刃部をもつ鉄斧が出土している。柄穴をもつ点では、さきの2例と共に、刃部の形状につい



第65図 丁字形利器集成

ては、片方が蛤刃、もう一方が圭頭刃と、丁字形利器の特徴③と一致する。また斧の本体部分には崩れた方形の透孔があり、丁字形利器の特徴④との関連も想定しうる^(註3)。

これらの資料との比較によって、丁字形利器にみる特徴①～③の起源を中国東北部や朝鮮半島に求めてよいことが明らかになったといえるだろう。また、特徴④についても、日本列島の鉄刀との関連とともに、外来系的要素と捉えることも可能である。

以上の諸特徴^(註4)をふまえ総合的に解釈すると、丁字形利器は中国や朝鮮に起源がある鉄器と評価でき、日本列島内への導入後は、国内で独自に発展した可能性も考慮すべきものといえるだろう。

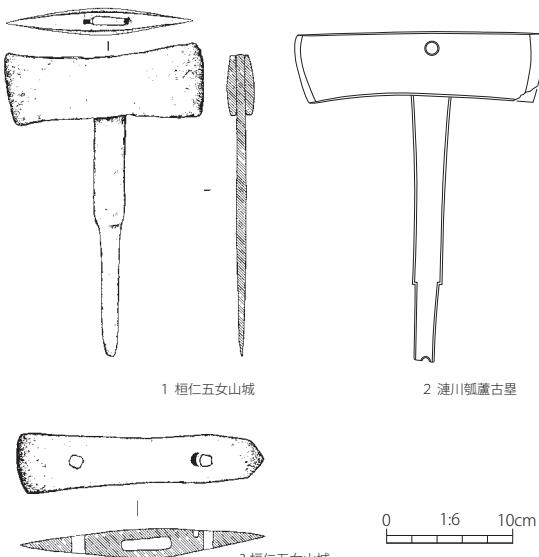
丁字形利器の祖形と捉えた資料を出土した五女山城と瓠蘆古墳はともに高句麗の城塞跡であることは注目してよい。後述するように、丁字形利器は高句麗系の儀器とみる大きな根拠といえよう。

以下、この解釈の妥当性を検討するにあたり、丁字形利器と関連が高い、柄穴をもつ鉄斧について検討を加えておきたい。

3 柄穴鉄斧の分布と推移

板状鉄斧や袋状鉄斧とは異なり、斧本体に刃と並行する方向に柄穴をあけ柄を挿入する斧を柄穴鉄斧と呼ぶ^(註5)。

有光教一は、この種の鉄斧を柄穴斧頭と呼び、朝鮮半島の事例を集めて、その系譜について紹介し



第66図 丁字形利器の祖形

た。合せて日本列島における類例にも触れ、国内での事例が極めて少ないと注意を促した(有光1967)。井口喜晴は、この種の鉄斧を穿孔斧と呼び、中国中原地域での出土例を集め、その性格について論じた(井口1973)。井口は柄穴鉄斧を形態的特徴から(i)刃幅が背幅よりも広く、刃部がほぼ平らなもの、(ii)刃幅が背幅よりも広く、刃部が弧状をなすもの、(iii)刃幅も背幅も同じで長方形を呈しているものの3型式に分類した。井口は柄穴鉄斧を工具としてとらえ、中国中原地域では前漢後期に出現し、後漢にかけて多く用いられたことを指摘している。

これらの業績を基礎にして、東潮は網羅的に東アジアにおける柄穴鉄斧(東は「柄穴斧」と呼ぶ)を集め、その分布の傾向と性格について総合的に触れた(東1982)。東の検討は、それまで学界に知られているものを悉皆的に取り上げるものであったが、韓国での調査事例が増加する以前の資料を対象としたものであったため、その分布の傾向と推移にかかる解釈の精度に課題が残された。

近年、朝鮮半島では柄穴鉄斧の出土例が増加傾向にある。高句麗の武器を体系的に論じた金性泰は、柄穴鉄斧が高句麗の城塞跡から多く出土していること、壁画古墳に柄穴鉄斧を装着した武器をもつ人物が描かれていること、文献資料に斧を戦争に用いた記述がみられること^(註6)などから、柄穴鉄斧は高句麗においては武器として用いられたと指摘している(金1994、2007)。

以上の研究史をふまえ、本稿では丁字形利器と直接関わる地域として、中国東北部から朝鮮半島、日本列島に注目する。出土品としては3～7世紀代の事例を集め、形態的分類を行い(第67図)、その分布、推移を検討しておきたい。

柄穴鉄斧は刃部のあり方から片刃と双方刃に大別でき、その形態的特徴から以下のように細分できる。

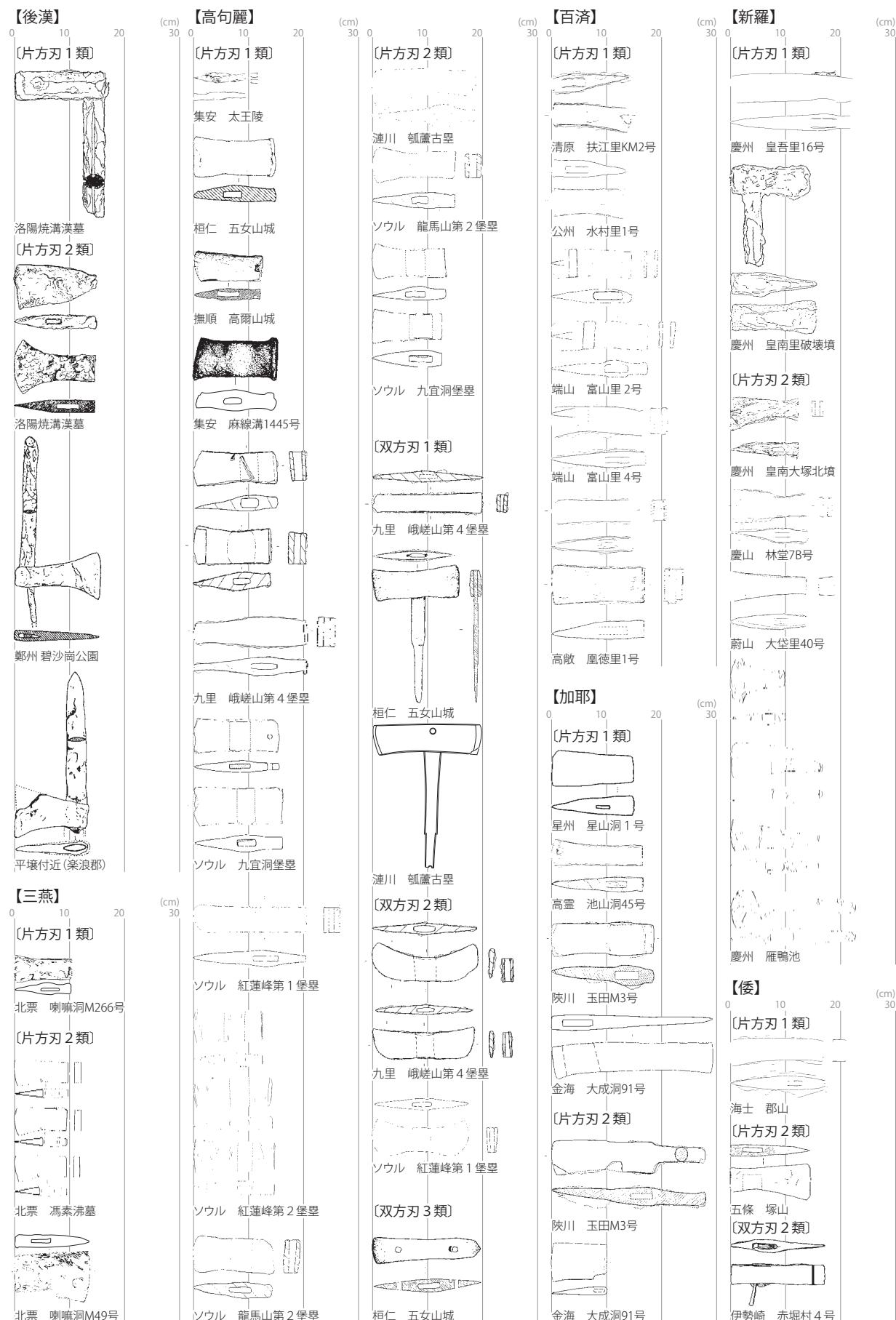
片刃刃 本体の片方のみに刃部があるもの

1類 柄穴部と刃部の幅に大きな違いがないもの

2類 柄穴部と刃部の幅が著しく異なるもの

2a類 刃部が直線的なもの

2b類 刃部が彎曲するもの



第 67 図 楠穴鉄斧集成

双方刃 本体の双方に刃部があるもの

1類 柄穴部と刃部の幅に大きな違いがないもの
(双方の刃部は直線的である)

2類 刃部が翼状に大きく彎曲するもの

3類 刃部が蛤刃と圭頭刃に分かれるもの

これらの大別をふまえた上で、各地から出土している柄穴鉄斧の分布と一覧を第68図と第4表に示す。発掘の規模や資料報告の精度に違いがあるので、中国東北部、朝鮮半島、日本列島の事例を同一基準でみることには問題がある。しかしながら、当該時期の考古資料が最も充実している日本列島では類例が極めて少ないと、朝鮮半島においても、多くの鉄器が出土している嶺南地域では出土例が限定的であること、ソウルとその近郊の城塞跡では総出土数の30%を超える20例ほどが集中すること、などは柄穴鉄斧の分布を考える上で動かしがたい傾向を示している。

中国中原地域における柄穴鉄斧の出土例を網羅的に集成することは困難であるが、洛陽焼溝漢墓において出土例が知られるように、前漢後期において柄穴鉄斧が成立することが知られる(井口1973)^(註7)。後漢代には、柄穴鉄斧が剣と組み合い、戟として用いられているものが知られている。その出土地は河南省から楽浪郡統治下の朝鮮半島まで認められ、比較的広い地域に拡散していたことが分かる。戟としての使用例を通じ、後漢代において、柄穴鉄斧は武器として用いられたことを知ることができるといえよう。

数は少ないながら、中国遼寧省の三燕の墓地からも柄穴鉄斧が出土している。これらの事例は4世紀に中心があることも重要である。朝鮮半島における出土例の多くが5世紀以降に降ることをふまえると、その古さが際立つ。中国中原地域に起源のひとつがある柄穴鉄斧は、東北アジアに拡散、浸透していくとみられるが、古い段階における受容地は、中原地域により近い三燕の地であったといえるだろう。

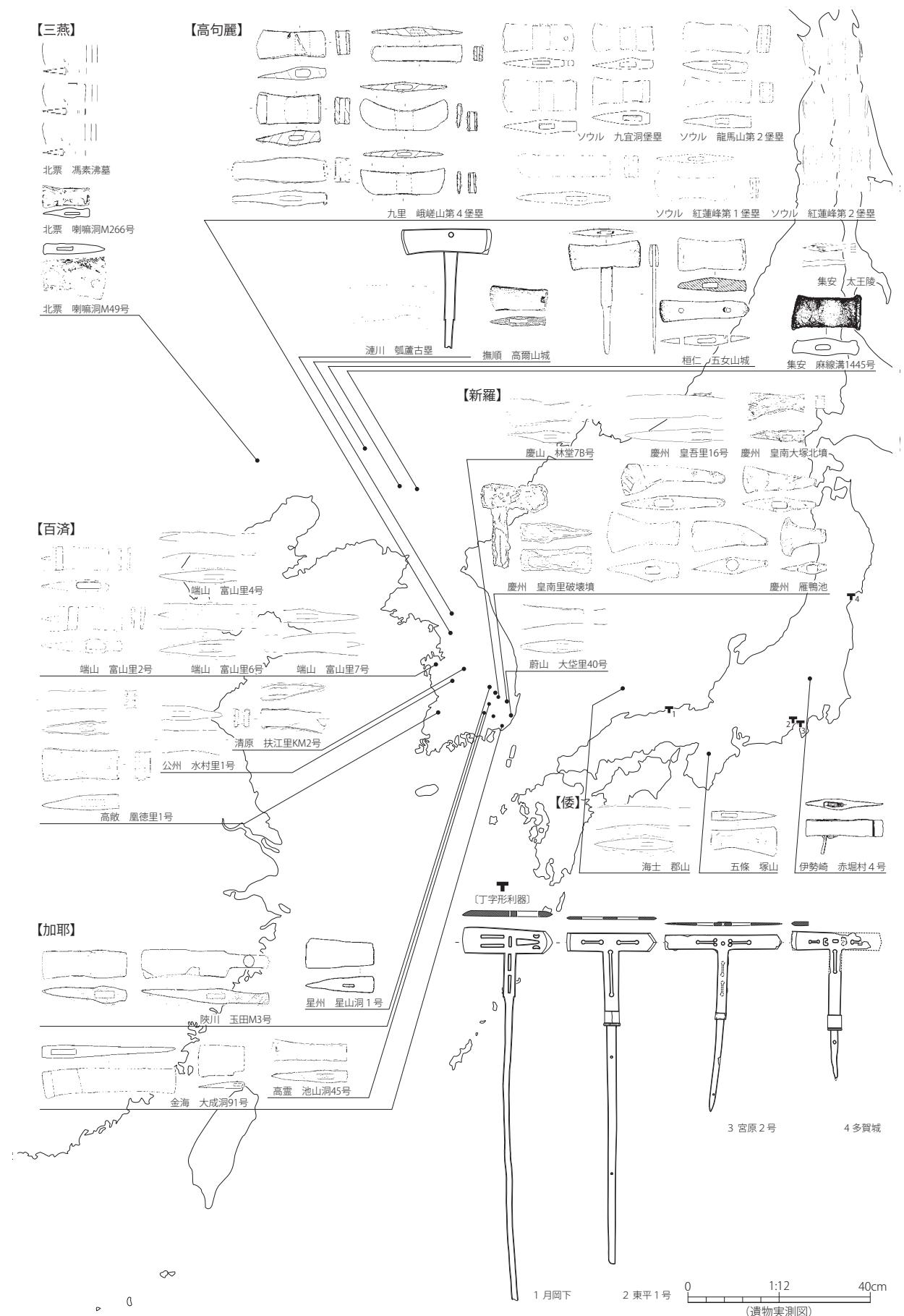
先述のとおり、高句麗の領域では、丁字形利器の直接的系譜がたどれる鉄柄付の柄穴鉄斧が確認できる。また、後述するように、高句麗の古墳壁画には、柄穴鉄斧を装着した武器が表現されているものがあ

る。さらに、ソウルとその近郊のみならず、五女山城や撫順高爾山城など中国遼寧省内の城塞跡から集中的に柄穴鉄斧が出土している事実も合せて判断すると、東北アジアにおいて柄穴鉄斧の資料が最も多く残されているのは高句麗の領域と評価しうる。高句麗は古墳時代の倭社会とも直接接觸する関係にもあることから考えても、柄穴鉄斧を祖形にもつ丁字形利器の故地も高句麗に求められる可能性が最も高いと判断できるだろう。

高句麗以南の百濟、新羅、加耶においては、柄穴鉄斧が集中的に出土することはない^(註8)。大型の墳墓を中心にして数点が散在する状況といえる。これら3地域での柄穴鉄斧のあり方を相互に比較すると、加耶と比べて百濟や新羅において比較的多くの事例が認められる。柄穴鉄器の出土量は、近隣の主要受容地である高句麗との地理的な距離が関連していると解釈できるだろう。日本列島は地理的にはさらにその外縁に位置するため、数点程度の事例しか認められないと解釈できる。

柄穴鉄器の推移について、簡単に触れておく。中国中原地域では後漢代において片方刃1類と2類(a・bの双方を含む)がみられる。柄穴鉄斧が東北アジア地域に拡散する過程においても、これら柄穴鉄斧の基本的な形態が伝えられていた可能性が高い。ただし、現状で確認できる三燕地域の柄穴鉄斧には、刃部が大きく湾曲する片方刃2b類の実例はみられない。4~5世紀の三燕地域では刃部が直線的な片方刃1類もしくは片方刃2a類が中心的な形態であったといえるだろう。

高句麗では、5世紀後葉から6世紀にかけての資料が充実している。ソウルやその近郊の軍事拠点である九宜洞堡壘や峨嵯山堡壘など、実戦に用いられた城塞跡からは実に多様な形態の柄穴鉄斧が出土している。高句麗では、柄穴鉄斧を用いた工具、武器が多用され、刃先である鉄斧本体も様々な用途に合わせ機能分化していたと評価できるだろう^(註9)。高句麗における事例の中に双方刃の柄穴鉄斧が含まれる点は、周囲の諸地域にはみられない特徴である。共伴遺物から、双方刃の柄穴鉄斧が増加する時期は6世紀と捉えてよいだろう。日本列島においても5世紀後葉の奈良県塚山古墳例は片方刃であることに



第68図 柄穴鉄斧の分布

第4表 柄穴鉄斧および丁字形利器出土例

勢力	国名	所在地	古墳・遺跡名	遺構等	種別	出土数			備考		
						片方刃	双方刃				
						1類	2類	1類	2類	3類	
柄穴鉄斧											
三燕	中国	遼寧省	北票	馮素拂墓	堅穴式石室	墳墓		3			北燕王族墓
	中国	遼寧省	北票	喇嘛洞M49号	木棺	墳墓		1			
	中国	遼寧省	北票	喇嘛洞M266号	木棺	墳墓	1				
高句麗	中国	遼寧省	桓仁	五女山城		城塞	1		1	1	高句麗城塞
	中国	遼寧省	撫順	高爾山城		城塞	1				高句麗城塞
	中国	吉林省	集安	太王陵	横穴式石室	墳墓	1				高句麗王陵
	中国	吉林省	集安	麻線溝1445号	横穴式石室	墳墓	1				
	中国	吉林省	集安	民主村採集		不明	1				
	韓国	京畿道	漣川	瓠蘆古墳		城塞		1	1		高句麗城塞
	韓国	京畿道	九里	峨嵯山第4堡壘		城塞	3		1	1	高句麗城塞
	韓国	京畿道	九里	峨嵯山シル峰堡壘		城塞	1				高句麗城塞
	韓国	京畿道	ソウル	九宜洞堡壘		城塞	2	2			高句麗城塞
	韓国	京畿道	ソウル	紅蓮峰第1堡壘		城塞	1			1	高句麗城塞
百濟	韓国	京畿道	ソウル	紅蓮峰第2堡壘		城塞	3				高句麗城塞
	韓国	京畿道	ソウル	龍馬山第2堡壘		城塞	1	1			高句麗城塞
	韓国	忠清北道	清原	南城谷山城		城塞	1				高句麗城塞
	韓国	忠清北道	清原	扶江里KM2号	横穴式石室	墳墓	1				
	韓国	忠清南道	公州	水村里1号	木棺	墳墓	1				有力首長墓
	韓国	忠清南道	端山	富山里2号	7号木棺	墳墓	2				
	韓国	忠清南道	端山	富山里4号	7号木棺	墳墓	1				
	韓国	忠清南道	端山	富山里6号	6号木棺	墳墓	1				
	韓国	忠清南道	端山	富山里7号	2号木棺	墳墓	1				
	韓国	全羅北道	高敞	鳳德里1号	4号石室	墳墓	1				有力首長墓
新羅	韓国	全羅北道	高敞	鳳德里1号	5号石室	墳墓	1				有力首長墓
	韓国	慶尚北道	慶州	皇南大塚北墳	積石木棺	墳墓		1			新羅王妃墓
	韓国	慶尚北道	慶州	皇吾里16号	第5櫛	墳墓	3				
	韓国	慶尚北道	慶州	皇南里破壞墳	第1櫛	墳墓	1				
	韓国	慶尚北道	慶州	皇南里破壞墳	第2櫛	墳墓	1				
	韓国	慶尚北道	慶州	雁鴨池	園池内堆積層	園池	5				新羅王宮園池
	韓国	慶尚北道	慶山	林堂7B号	副櫛	墳墓	1				有力首長墓
	韓国	慶尚北道	大邱	達西古墳群		墳墓	1				
	韓国	慶尚南道	蔚山	大垈里40号	横口式石室	墳墓		1			
	韓国	慶尚北道	高靈	池山洞45号	2号石櫛	墳墓	1				大加耶王墓
加耶	韓国	慶尚北道	星州	星山洞1号	横口式石室	墳墓	1				有力首長墓
	韓国	慶尚南道	陜川	玉田M3号	木棺	墳墓	1	1			有力首長墓
	韓国	慶尚南道	昌寧	校洞89号		墳墓	1				有力首長墓
	韓国	慶尚南道	金海	大成洞57号		墳墓		1			
	韓国	慶尚南道	金海	大成洞91号	木棺	墳墓	1	1			有力首長墓
倭	日本	島根県	海士	郡山所在古墳		墳墓	1				採集品
	日本	奈良県	五條	塚山	箱形石棺	墳墓		1			
	日本	群馬県	伊勢崎	赤堀村4号	横穴式石室	墳墓			1		

丁字形利器

倭	日本	兵庫県	香美	月岡下	横穴式石室	墳墓			1	
	日本	静岡県	富士	東平1号	横穴式石室	墳墓			1	
	日本	静岡県	沼津	宮原2号	横穴式石室	墳墓			1	
	日本	宮城県	多賀城	多賀城	66次SI2300B	堅穴建物			(1)	鍛冶工房

凡例：バーレン内は不確定であることを示す ゴシックは鉄柄をもつ事例 勢力区分は便宜的にあてはめたものがある

対して、6世紀後葉の群馬県赤堀村4号墳の事例が双方刃であり、上述の推移の傾向と整合的である。

6世紀以降の新しい段階になると、柄穴鉄斧本体の扁平化が顕著になり、円孔や方形孔などの透孔があけられるものが散見できるようになる。双方刃3類とした蛤刃と圭頭刃の組合せの成立^(註10)も6世紀のこととみられ、扁平化や透孔を持つ事例の増加がみられることも勘案すると、この時期の高句麗において柄穴鉄斧の一部が儀器化すると解釈しうる。柄穴鉄斧に鉄柄が装着される事例についても、木

柄を鉄に置き換える儀器化の特徴と共に通し（鈴木2002）、象徴的器物を特徴づける属性の一つとみてよい。こうした高句麗における柄穴鉄器の様相から判断すると、丁字形利器は柄穴鉄斧を用いた武器の象徴性を顕在化させた姿を呈していると評価できるだろう。

柄穴鉄斧が出土した墳墓の階層性についても触れておきたい。柄穴鉄斧が出土した墳墓には、北票馮素拂墓（北燕王族墓）、集安太王陵（高句麗王陵）、慶州皇南大塚北墳（新羅王妃墓）、高靈池山洞45号

墳（大加耶王陵）など各領域の王墓や王族墓が数多く含まれる。また、公州水村里1号墳や高敞鳳德里1号墳、慶山林堂7号墳、星州星山洞1号墳、昌寧校洞89号墳、陜川玉田M3号墳、など小地域でも最有力階層の造営と目される墳墓からの出土例も目立つ。柄穴鉄斧が中小墳墓から出土する事例はむしろ稀であり^(註11)、副葬品としての柄穴鉄斧は、実用的な器物というよりも、上位階層に共有される儀器としての性格が強いことを示唆している。丁字形利器もこうした副葬用柄穴鉄斧の象徴的意味が特化する中で出現したものと捉えてよいだろう。

統一新羅の王宮に附属する苑池である慶州雁鴨池から柄穴鉄斧がまとまって出土していることも注目できる。雁鴨池は、新羅文武王14年（674）に造営されており、池内から多様な遺物が出土している。出土品の中には8世紀以降に降るものがあるが、仏像や金属工芸品を含むなど一般的な集落出土品とは明らかに異なり、国家祭祀にかかわる奉斎品との性格が見出せる。雁鴨池では5点の柄穴鉄斧が報告されているが、その形態は実に多様であり、たんなる工具というよりも、多種類を揃えた儀礼用具であった可能性を示唆している。

日本列島における柄穴鉄斧の出土例は3例と少ないがその内容を瞥見しておこう。島根県の郡山所在古墳の事例は採集品であるため、副葬された古墳の実態をうかがうことは難しい。ただし、柄穴鉄斧を出した古墳の近隣には、鉄鋌を出土した郡山西古墳や鉄柄刀子を出土した新開3号墳など、朝鮮半島系の鉄器を保有する古墳が集中する。郡山所在古墳の事例は、隠岐における5世紀の朝鮮半島系鉄器の移入と関連づけて理解することができるだろう（角田2017）。

奈良県塚山古墳は初期の金銅製品や鍛冶具など渡来系遺物が豊富に出土した五條猫塚古墳を含む近内古墳群の近隣地に築かれた一辺24mの方墳である。結晶片岩製の箱形石棺を埋葬施設とし、甲冑、鹿角装大刀、鉄鎌、農工具、漁具などが出土した。築造時期は5世紀後葉である。柄穴鉄斧は副室の工具の集積内において出土した。渡来系要素が濃厚な近内古墳群に隣接して古墳が築造されており、塚山古墳にかんしても、その被葬者に渡来系集団との関係を見出すことは許されよう。

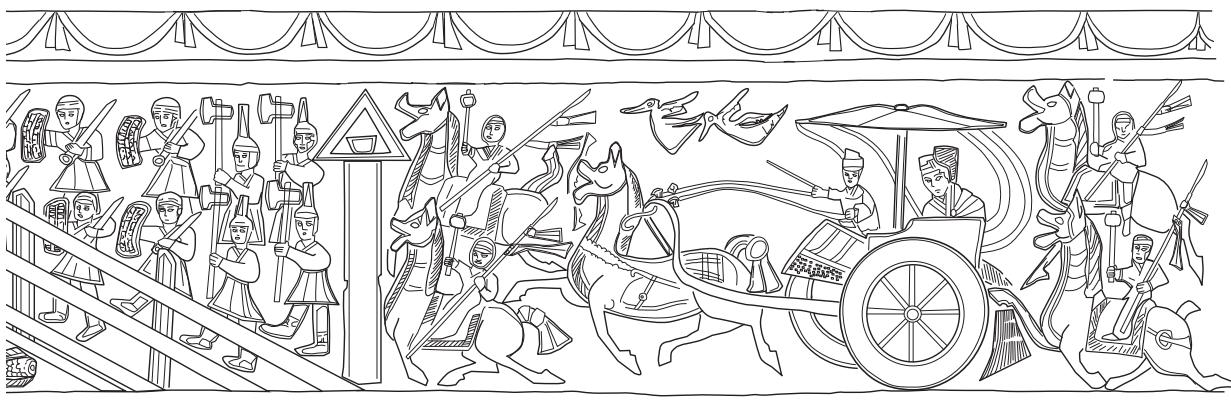
6世紀後葉の築造である群馬県赤堀村4号墳では、柄穴鉄斧と共に全長106cmの鉄棒製品が副葬されていた。この鉄器は一端が把手のように成形されている。この製品は、鉄柄のサルポとみるのが妥当であろう。鉄柄のサルポは朝鮮半島系の儀器の一つであり、その保持、副葬には、水田の畝立てや水口の開削といった有力階層が執行する農耕儀礼にかかわる象徴的意味がある。この棒状品を鉄柄のサルポと捉えてよければ、赤堀村4号墳は柄孔鉄斧とともに渡来系器物が集積する特異な古墳であると評価できる。

以上、日本列島内における柄穴鉄斧を瞥見してきた。当地における柄穴鉄斧は類例が少ないながらも、渡来系文物が集まる地域や古墳との関連を見出す事ができる。こうした出土地や古墳にかかわる情報と、当地における出土例が極めて限定的な状況から判断すると、日本列島から出土する柄穴鉄斧は朝鮮半島からの搬入品であり、特殊な用途が関わるものや象徴的意味が付与されたものであったと捉えてよいだろう。

4 斧鉄とその象徴性

高句麗の古墳壁画の中に、柄穴鉄斧を装着した武器を手にした人物を見出すことができる。北朝鮮の平壤駅前二室墓や、南浦薬水里古墳、安岳3号墳などでは、軍隊の一部に柄穴鉄斧を装着した武器が描かれている（第69図-2・3）。安岳3号墳は永和13年（357）に死去した前燕の貴族、冬寿の墓であることが、前室壁画の墨書銘から明らかにされており、4世紀半ばの壁画墓であることが知られる。これらの壁画に描かれた柄穴鉄斧は、長い柄がつけられ、いずれも肩に担がれている。柄を装着した全長は1～1.5mほどの長大なものであり、丁字形利器の使用方法を考える上でも参考になる。柄穴鉄斧を装着した道具は平服姿の人物の持ち物で、この道具を担ぐ人々は斧鉄手と呼ばれている。斧鉄手はある程度の集団として表現されており、近隣に騎兵が描かれていることから、この道具も武器と考えてよいだろう。

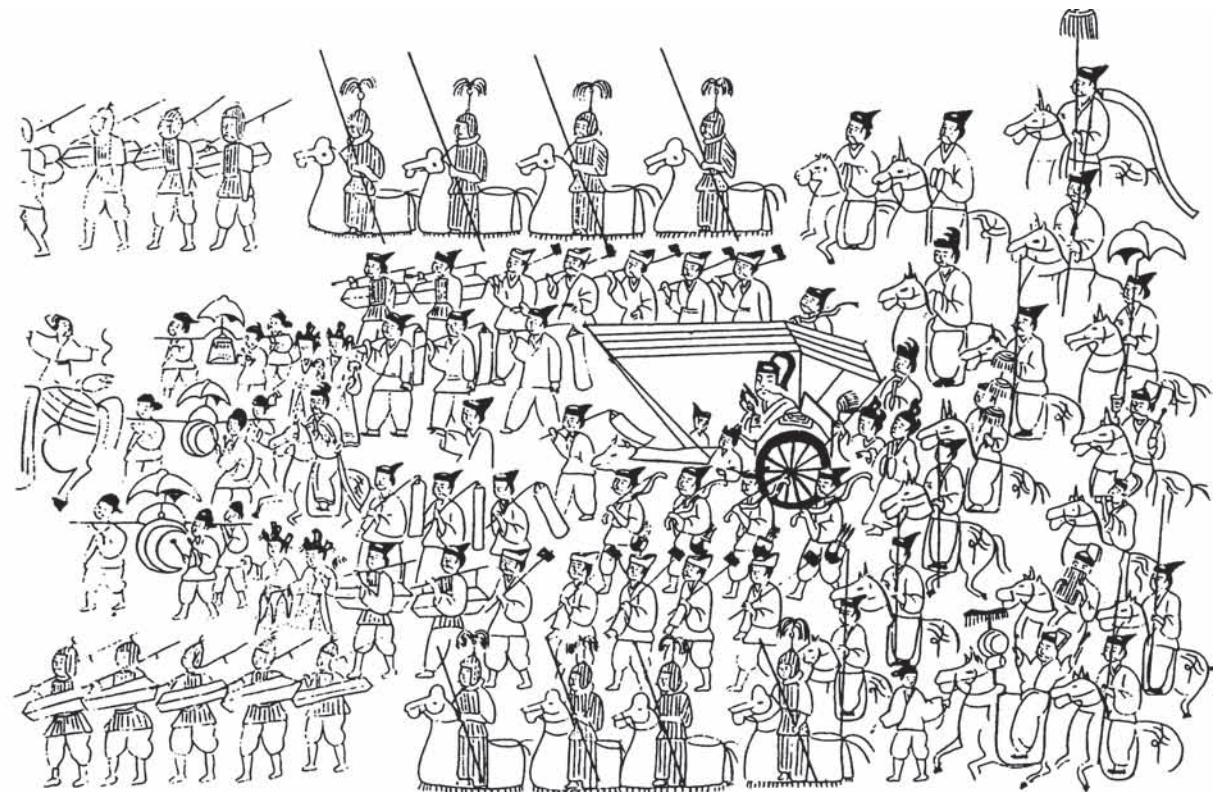
柄穴鉄斧を装着した武器を携えた軍事編成は、山



1 淄南漢画像石墓



2 莱水里古墳



3 安岳 3号墳

第69図 後漢画像石・高句麗古墳壁画にみる闘斧と軍事編成

東省沂南漢画像石墓（第69図-1）を代表例に中原地域やその周囲の画像石にみられ、高句麗を中心とする東北アジアに限定されるものではないことは明らかである。柄穴鉄斧を武器として用いることは、後漢代に戟として用いたことからもうかがえるように、中原地域にも広く受け入れられている。器物を叩き壊し、敵兵をなぎ倒す闘斧（戦斧）は広く中央アジアから東アジアに浸透しており、その多くは刃先として柄穴鉄斧が用いられたとみてよいだろう。

柄穴鉄斧の象徴性を考える上では、中国における「斧鉄」にかかる認識も深くかかる（第70図）。斧鉄とは字義のごとく鉄形の斧のことをさす。古くは袋部をもつ青銅器であったが、後漢以降は柄穴鉄斧がその刃部として用いられた。斧鉄は、軍事統率権を示す儀器であり、君主が出征する將軍に渡すものであった。また、斧鉄は首を切り落とす道具としても用いられたことから、刑罰執行権の象徴物としても認識されている（林1992、信1996）。

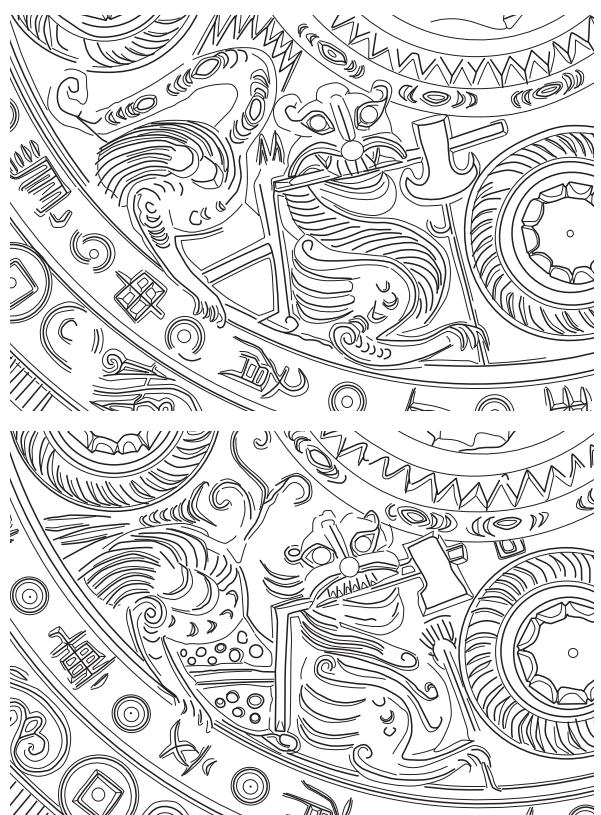
斧鉄にかかる象徴性は、後漢以降の図像表現に認めることができる。軍事統率権を示す斧鉄は、車馬に乗る將軍の持ち物として沂南漢画像石墓などに



第70図 中国画像石にみる斧鉄

表現されている。また、刑罰執行権を示す斧鉄も、山東省肥城孝堂山祠堂にみると、処刑された人物の生首に伴って表現されている。髪を切る刑罰の場面を描いた画像石として著名な山東省諸城漢墓にも、斧鉄とみられる道具を持った人物が集団で表現されている。斧鉄とみられる道具は刀とともに髪を切る利器として扱われていた様子がうかがえる。

古代中国において斧鉄は権力の象徴物として広く認識されていたことを紹介した。柄穴鉄斧の出土事例が多い朝鮮半島の中央部以北においても、その認識は変わらなかったとみられる。日本列島からの出土品についても、三角縁神獸鏡の鏡背図像（第71図）にみると、斧鉄にまつわる表現が見出せる。制度として明確化されていたとはいがたいが、倭の社会においても斧鉄にかかる思想や象徴的意味はある程度、理解されていたと考えられる。7世紀の日本列島内に丁字形利器が導入された際にも斧鉄との関連が意識され、この特異な形状の利器を軍事統率権や刑罰執行権の象徴物として捉えていた可能性は充分、考慮してよいだろう。

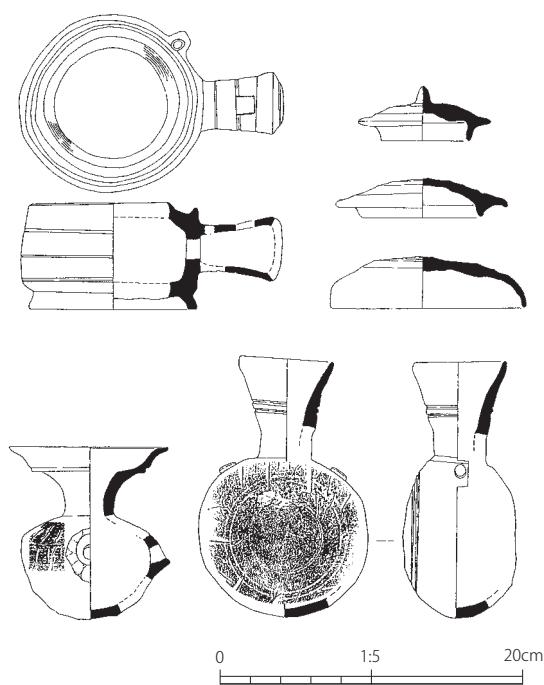


第71図 三角縁神獸鏡にみる斧鉄

5 丁字形利器出土古墳とその性格

さいごに、丁字形利器を出土した古墳とその周辺の地域的特性について、若干触れておきたい。丁字形利器1類が出土した月岡下古墳は、日本海に向って開かれた小平野を望む位置に構築されている。この古墳が立地する兵庫県の香住平野には、先行する有力古墳はみられない。高塚古墳も極めて少なく、代わりに外来系埋葬施設と評価しうる箱形石棺墓が多く築かれている。箱形石棺墓が築かれた詳細な時期は不明ながら、月岡下古墳が横穴式石室墳であることを考えると、箱式石棺を構築する集団よりは上位階層の墳墓であったとみてよいだろう。月岡下古墳の近隣地には、初期の毛彫馬具を出土したと伝えられている油良地区所在古墳が知られ、7世紀前葉を中心、突如として豊富な副葬品をもつ古墳が構築された地域といえる。

月岡下古墳が構築された但馬地域は、無袖石室が卓越する地域でもある。堅穴系横口式石室を起源にもつような開口部に段をもつ大型無袖石室もみられ、東平1号墳が築かれた東駿河の状況と類似する。段をもつ無袖石室の導入には、渡来系集団が関わっている可能性があり、但馬と東駿河において類似した地域的特性を見出すこともできるだろう。



第72図 宮原1号墳出土遺物

丁字形利器2類が出土した宮原2号墳は、飛鳥II期、7世紀第2四半期を中心とした古墳であり、出土品にみられる装飾馬具や壺燈などは東平1号墳例と共に通性が高い。双方の古墳被葬者には近似した性格が読み取れる。宮原2号墳の隣接地には、次の世代に構築されたとみられる宮原1号墳が築かれている。宮原1号墳からは中空円面硯が出土しており(第72図)、この地域に古墳を構築した集団の性格を考えるうえで注目に値する。古墳副葬品に硯が選択されることは極めて異例であり、被葬者には文字と関係が深い人物が想定できる。中空円面硯が副葬された被葬者は、評の経営といった文字を必要とする組織の運営にかかわった人物とみてよいだろう。宮原2号墳と1号墳は相互に関連が高い位置関係にあり、その被葬者は同一系譜に属すると捉えられる。丁字形利器を保有した人物の後継者の一人に文字との関連が見出せることは、被葬者集団の性格を考える上で看過できない特徴といえよう。

同じく丁字形利器2類が出土した東平1号墳も、飛鳥II期、7世紀第2四半期の築造と考えられる。直径13mと規模こそ小さいものの、近隣地には白鳳後期創建の寺院である三日市廃寺が築かれ、奈良時代なると富士郡家の中枢地とみられる東平遺跡の建物群が構築されている。東平1号墳は、後に郡家が展開する地域に築かれた唯一の終末期古墳であり、その立地環境には明確な計画性がうかがえる。その被葬者の後継者には後の郡司層に連なる人物が含まれていた蓋然性が高いとみられよう。

富士郡域は、渡来系集団との関係が深い堅穴系横口式石室を祖形にもつ無袖石室が排他的に構築される地域でもある(鈴木2017)。東海地方では極めて珍しい古墳時代の鍛冶具を出土した中原4号墳(6世紀後葉の築造)も東平1号墳の近隣地にある。こうした横穴式石室導入期の特徴から判断すると、富士郡域は渡来系技術集団の入植地の一つであったと目される。無袖石室が排他的に構築され続けることを考慮すると、当該地域の7世紀における渡来系集団の割合も周辺地域と比べると高かった可能性は十分考慮してよい。東平1号墳から出土した丁字形利器の存在意義もこうした外来的要素が濃厚な地域的特性が関係していると捉えられる。

結語

ここまで検討において、丁字形利器が柄穴鉄斧を装着した武器を祖形に成立した朝鮮半島系の儀器であり、軍事統率権や刑罰執行権を象徴する斧鉄と関連があることを述べてきた。その淵源地は、その祖形とみられる柄穴鉄斧の集中度から判断して、高句麗の領域に求めた。また、丁字形利器は7世紀初頭頃（TK209型式新相期）に出現し、その後7世紀第2四半期（飛鳥II期）にかけて日本列島内で製作された可能性も指摘した。

7世紀第2四半期に位置づけられる東平1号墳例は副葬古墳の全容が判明している点で、丁字形利器の典型例といえ、地域の最有力首長層の権威を象徴する器物として、様々な儀式の場で用いられたことが想定できよう。朝鮮半島系譜の儀器は、金銅装サルポにみるように、7世紀前半の古墳副葬品に散見できる。それらの器物を副葬した古墳の被葬者は、地域社会の中に居住する渡来系集団を統括することが期待されていたと捉えられる。地域社会の統率者それぞれの出自はつまびらかにできないものの、少なくとも丁字形利器の系譜を重視する限り、その保有者は高句麗を淵源地として意識していた可能性は考慮してよい。さらに、東平1号墳のような、後の郡家中枢地に築かれる古墳の立地環境から判断すると、丁字形利器の所有者には奈良時代に郡司層に成長するような地域の最有力首長としての性格を読み取ることも許されよう。

以上、7世紀前半における丁字形利器は、渡来系集団を統べる権威の象徴として用いられた可能性を指摘した。日本列島中央部の広域に評制がいきわたる7世紀後葉までの間、地域秩序を維持する儀仗の武器が機能していたことを示す事例として、東平1号墳出土の丁字形利器は重要な意味をもつと評価できる。

謝辞

武器としての斧を考えるように示唆を受けたのは、大阪大学考古学研究室において都出比呂志先生に指導いただいた演習の時であるから、既に四半世紀を経過している。以来、関連した資料に接するたびに思いをめぐらせてみたものの、今に至るまで論文にまとめるには至らなかった。今回、はからずも30年来の宿題に一定の答えを出せたのは、富士市教育委員会からの依頼によるものであったが、改めて様々な出会いの連続の中に生きていることを実感した次第である。本稿は都出先生からの課題がなければ実現できなかつたものであり、まずは先生のご指導に感謝したい。また、貴重な機会を与えていただいた富士市教育委員会および挿図製作に快く協力いただいた佐藤祐樹氏にも謝意を表したい。

最後になったが、本稿をなすにあたり、次に示す方々、機関からご協力、ご教示を得た。その名を記し、深くお礼申し上げる。

金武重、趙晟元、李承一、石松崇、岩本崇、臼杵勲、大谷晃二、大森信宏、菊地芳朗、金宇大、斎藤大輔、鈴木京太郎、高田健一、高橋透、古田成美、村上恭通、柳本照男、横澤真一、香美町教育委員会、静岡県埋蔵文化財センター

註

- 1 本稿では、中華人民共和国を中国、朝鮮民主主義人民共和国を北朝鮮、大韓民国を韓国と呼ぶ。また、対象とする東北アジアとは、日本列島、朝鮮半島、中国東北部（遼寧省、吉林省、黒龍江省）を中心とする地域をさす。
- 2 今回、東平1号墳の正式報告を作成するにあたり、月岡下古墳の出土遺物や出土状態を再検討した。その詳細は本書第4章第1節に掲載している。資料調査にあたっては、香美町教育委員会及び石松崇氏にご高配をいただいた。
- 3 丁字形利器にみられる透孔の起源を、柄穴をもつ鉄斧の透孔のみに求めるのは難しい。本文中に示した通り、丁字形利器の透孔の形状は日本列島内で製作された可能性を示唆するが、同時に、朝鮮半島の有棘利器など、かの地で用いられた儀器に透孔を多用する事例があることも注目しておく必要があるだろう（徐・李1997）。今のところ、丁字形利器にみられる透孔の直接的な起源を示すことは難しいが、中国や朝鮮にみられる儀器に加え、日本列島内における刀の锷などの透彫り意匠などが関連していると捉えておきたい。
- 4 特徴⑤～⑦については、中国や朝鮮からの影響とともに、日本列島内で製作が繰り返された結果、成立した特徴である可能性も考えられる。
- 5 韓国ではこの種の鉄斧を「横孔斧」と呼んでいる。柄穴鉄斧という呼称は、坂靖によって示されたものであり（坂2013）、本稿もこの名称を踏襲する。
- 6 『三国史記』には、624年、新羅が百濟に攻められた際に守備にあたった新羅の將軍、訥催が百濟兵の振りかざす

斧によって撃たれたとの記録がある(金2007)。『三国史記』卷47列伝七訥催条「有一賊出後、以斧擊訥催」(この時、敵の一人が後から出てきて、斧をもって訥催を撃ち、林訳1975、188頁)。

- 7 柄穴鉄斧と同様の構造をもつ斧は、北方遊牧民族にも認められる。闘斧としての使用方法も共通することから、何らかの関係を想定することも可能であろう。ただし、本稿で対象とする地域や時期とは懸け隔てがあることから、ここでは、中国中原地域とその周辺世界に限って検討を進めたい。
- 8 柄穴鉄斧の出土地については第4表にまとめたが、ここでは図面や写真などで実物の存在が確認できる事例のみを扱った。第4表に示したもの以外にも、扶余陵山里3号墳、羅州大安里、京都府穀塚古墳から柄穴鉄斧が出土していることが、浜田耕作と梅原末治によって指摘されている(浜田・梅原1922、12頁)。ただし、これらの事例を含めても、本文中に示す傾向に影響はない。
- 9 片方刃の柄穴鉄斧の中には、基部(刃部の逆側)が潰れた状況が確認できるものが散見できる。基部を強く叩いた痕跡とみられ、柄穴鉄斧の使用方法の一端を伝えている。
- 10 古来中国では玉器「圭」とその先端形状は権力の象徴として捉えられていた。丁字形利器の圭頭刃にも、何らかの象徴的な意味が込められていた可能性がある。
- 11 このほか、清原扶江里KM2号墓、端山富山里墳墓群、慶州皇吾洞16号墳なども地域の中では有力階層の墳墓であり、被葬者の階層性の高さがうかがえる。

参考文献(日本語文献)

- 東潮 1982 「東アジアにおける鉄斧の系譜—古代朝鮮の資料を中心として—」『森貞次郎博士古希記念古文化論集』
- 東潮 1999 「楽浪郡の鉄」『古代東アジアの鉄と倭』溪水社
- 有光 教一 1967 「朝鮮—三国時代の農具と工具—」『日本の考古学VI』河出書房
- 井口 喜晴 1973 「漢代の鉄器について—中原出土の農工具を中心に—」『文学論集』50 愛知大学文学会
- 小野 真一 1957 「スルガの国東部古墳群」『沼津長塚古墳』沼津市教育委員会
- 角田 徳幸 2017 「海士町郡山西古墳の鉄鋌」『島根考古学会誌』第34集 島根考古学会
- 北野 耕平 1957 「塚山古墳」『奈良県埋蔵文化財調査報告書』第一輯 奈良県教育委員会
- 静岡県 1930 「沼津市上香貫の丁字形利器を出したる古墳」『静岡縣史』第1巻
- 伸 立祥 1996 『中国漢代画像石の研究』同成社
- 末永 雅雄 1941 「利器の転用」『日本上代の武器』弘文堂書房
- 末永 雅雄 1957 「郡山古墳出土の鉄斧」『史泉』7・8 関西大学史学会
- 鈴木 嘉昭・後藤 守一 1922 「丁字形利器発見古墳」『考古学雑誌』第12巻第7号 日本考古学会

鈴木一有 2002 「捩りと渦巻き」『考古学論文集 東海の路』

鈴木一有 2017 「東海地方における横穴系埋葬施設の多様性」『一般社団法人日本考古学協会2017年度宮崎大会研究発表資料集』日本考古学協会2017年度宮崎大会実行委員会

- 滝沢 誠 2002 「宮原二号墳」『沼津市史』資料編 考古 沼津市教育委員会
- 浜田 耕作・梅原 末治 1922 『大正七年度古蹟調査報告』第一冊 朝鮮総督府
- 林 英樹訳 1975 『三国史記』下 雜志 列伝 三一書房
- 林 巳奈夫 1992 『石に刻まれた世界—画像石が語る古代中國の生活と思想—』東方書店
- 坂 靖 2013 「塚山古墳」『5世紀のヤマト』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 久松 義昭・平林 将信 1990 『東平第1号墳発掘調査概報』富士市教育委員会
- 松井 和幸 2001 『日本古代の鉄文化』雄山閣

参考文献(ハングル文献)

- 金性泰 1994 「高句麗の武器(2)一鉄鉾、戟、弩、斧—」『文化財』第27号
- 金性泰 2007 「高句麗の武器、武装、馬具」『高句麗の文化と思想』東北亞歴史財團(東北亞歴史財團編、篠原啓方訳2013『高句麗の文化と思想』明石書店)
- 徐玲男・李賢珠 1997 「三韓・三国時代鉄器の儀器的性格に対する一考察」『伽耶考古学論叢2』(財)駕洛国史蹟開発研究院

本稿で触れた古墳、遺跡にかかる典拠文献

- 【中華人民共和国】
- 〔河南省〕
- 洛陽焼溝漢墓:中国科学院考古研究所1959『洛陽焼溝漢墓』科学出版社
- 浚县出土:李京華1965「漢代の鉄釣鏃和鉄鍔戟」『文物』1965年第2期
- 鄭州碧沙崗公園:鄭州市博物館1966「河南鄭州市碧沙崗公園東漢墓」『考古』1966年第5期
- 〔山東省〕
- 沂南漢画像石墓:曾昭炯ほか1956『沂南古画像石墓発掘報告』文化部管理局出版
- 肥城孝堂山:閔野貞1916『支那山東省に於ける漢代画像墓の表飾』、伸立祥1996『中国漢代画像石の研究』同成社
- 山東省諸城漢墓:諸城県博物館・任日新1981「山東省諸城漢墓画像石」『文物』1981年第10期
- 〔遼寧省〕
- 撫順高爾山城:徐家國・孫力1987「遼寧撫順高爾山城発掘簡報」『遼海文物学刊』1987年第2期
- 北票喇嘛洞:遼寧省文物考古研究所ほか2004「遼寧北票喇嘛洞墓地1998年発掘報告」『考古学報』2004年第二期

- 北票馮素拂墓：遼寧省博物館 2015『北票馮素拂墓』文物出版社
- 桓仁五女山城：遼寧省文物考古研究所 2004『五女山城—1996～1999、2003年桓仁五女山城調査発掘報告一』文物出版社
[吉林省]
- 集安太王陵：吉林省文物考古研究所・集安市博物館 2004『集安高句麗王陵—1990～2003年集安高句麗王陵調査報告一』文物出版社
- 集安麻線溝 M1445号：吉林省文物工作隊・集安文管所 1984「1976年集安洞沟高句麗墓清理」『考古』1984年第1期
- 集安民主村：吉林省文物考古研究所ほか 2010『集安出土高句麗文物集粹』科学出版社
- 【朝鮮民主主義人民共和国】**
- [平安南道]
平壤駅前壁画古墳：社会科学院考古学及民俗学研究所 1958『大同江流域古墳発掘報告』科学院出版社
- 南浦薬水里：朱栄憲 1963「薬水里壁画古墳発掘報告」『各地遺跡整理報告』科学出版社
- [黄海南道]
安岳3号墳：科学院考古学及民俗学研究所『安岳3号墳発掘報告』科学院出版社
- 【大韓民国】**
- [京畿道]
漣川瓠蘆古墳：韓国土地住宅公社 2014『漣川瓠蘆古墳IV』
ソウル九宜洞：九宜洞報告書刊行委員会 1997『漢江流域の高句麗要塞』
ソウル紅蓮峰第1堡壘：高麗大学校考古環境研究所 2007『紅蓮峰第1堡壘—発掘調査総合報告書一』
ソウル紅蓮峰第2堡壘：高麗大学校考古環境研究所 2007『紅蓮峰第2堡壘—1次発掘調査報告書一』
ソウル龍馬山第2堡壘：ソウル大学校博物館 2009『龍馬山第2堡壘—発掘調査報告書一』
九里峨嵯山第4堡壘：ソウル大学校博物館 2000『峨嵯山第4堡壘—発掘調査報告書一』
九里峨嵯山シル峰堡壘：ソウル大学校博物館 2002『峨嵯山シル峰堡壘』
[忠清北道]
清原美江里古墳群：高麗大学校埋蔵文化財研究所 2002『美江里遺蹟』
清原南城谷山城：忠北大学校博物館 2004『清原南城谷高句麗遺跡』
[忠清南道]
端山富長里：忠清南道歴史文化研究院 2008『端山富長里遺蹟』
公州水村里1号：忠清南道歴史文化研究院 2007『公州水村里遺蹟』
扶余陵山里3号：浜田耕作・梅原末治 1922『大正七年度古蹟調査報告』第一冊 朝鮮総督府 (12頁)
[全羅北道]
高敞鳳德里1号：馬韓・百濟文化研究所 2016『高敞鳳德里1号墳』
[全羅南道]
羅州大安里：浜田耕作・梅原末治 1922『大正七年度古蹟調査報告』第一冊 朝鮮総督府 (12頁)
[慶州北道]
慶州皇南大塚北墳：文化財管理局文化財研究所 1985『皇南大塚（北墳）』
慶州皇吾里16号：有光教一・藤井和夫 2000『朝鮮古蹟研究會遺稿I』ユネスコ東アジア文化研究財團・財団法人東洋文庫
慶州皇南里：朴日薰 1964「皇南里破壞古墳発掘調査報告」『皇南里四・五号古墳 皇南里破壞古墳発掘調査報告』国立博物館古蹟調査報告書第5冊 国立博物館
慶州雁鴨池：文化財管理局 1978『雁鴨池』（西谷正ほか訳 1993『雁鴨池』学生社）
慶山林堂7号：嶺南大学校博物館 2005『慶山林堂地域古墳群VII林堂7号墳』
大邱達城古墳群：野守健・小泉顕夫 1931「慶尚北道達城郡達西面古墳調査報告」『大正十二年度古蹟調査報告』第1冊 朝鮮総督府、国立大邱博物館 2015『大邱達城遺蹟II—達城古墳群 発掘調査報告書(1)』日帝強占期資料調査報告 14輯
高靈池山洞45号：高靈郡 1979『大伽倻古墳発掘調査報告書』
星州星山洞1号：浜田耕作・梅原末治 1922『大正七年度古蹟調査報告』第一冊 朝鮮総督府
[慶尚南道]
蔚山大垈里40号：蔚山文化財研究院 2006『蔚山大垈里中垈遺蹟』
陜川玉田M3号：慶尚大学校博物館 1990『陜川玉田古墳群II』
金海大成洞57号：大成洞古墳博物館 2013『東アジアの交易の架橋 大成洞古墳群』
金海大成洞91号：大成洞古墳博物館 2015『金海大成洞古墳群—85号墳～91号墳一』
【日本国】
[島根県]
郡山所在：末永雅雄 1957「郡山古墳出土の鉄斧」『史泉』7・8 関西大学史学会、角田徳幸 2017「海士町郡山西古墳の鉄鋌」『島根考古学会誌』第34集
郡山西：角田徳幸 2017「海士町郡山西古墳の鉄鋌」『島根考古学会誌』第34集
新開3号墳：隱岐島前教育委員会 1990『新開古墳群』
[鳥取県]
普段寺：高田健一（編）2013『山陰における前方後円墳の出現過程』鳥取大学地域学部
[奈良県]

塚山：北野耕平・伊達宗泰 1957 「中期古墳」『奈良県埋蔵文化財調査報告書』第一輯 奈良県教育委員会

五條猫塚：奈良国立博物館 2013・2014・2015 『五條猫塚古墳の研究』

[兵庫県]

月岡下：本書

油良地区所在古墳：大手前大学史学研究所・香美町教育委員会 2014 『文堂古墳 図版篇』図版 84

[京都府]

穀塚：浜田耕作・梅原末治 1922 『大正七年度古蹟調査報告』 第一冊 朝鮮総督府（12 頁）

[静岡県]

宮原 1 号：滝沢誠 2002 『宮原一号墳』『沼津市史』資料編 考古 沼津市教育委員会

宮原 2 号：鈴木嘉昭・後藤守一 1922 『丁字形利器発見古墳』『考古学雑誌』第 12 卷第 7 号 日本考古学会、滝沢誠 2002 『宮原二号墳』『沼津市史』資料編 考古 沼津市教育委員会

中原 4 号：佐藤祐樹（編）2016 『伝法 中原古墳群』富士市教育委員会

東平 1 号：久松義昭・平林将信 1990 『東平第 1 号墳発掘調査概報』富士市教育委員会、本書

[群馬県]

赤堀村 4 号：松村一昭 1979 『赤堀村地蔵山の古墳 2—伊勢崎 北部土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告—』赤堀村教育委員会

[宮城県]

多賀城：新藤秋輝・丹羽茂・柳澤和明・白崎慶介 1996 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1995 多賀城跡—第 66 次調査』宮城県多賀城跡調査研究所

図出典

- 第 64 図：富士市教育委員会作成の図に加筆
- 第 65 図：富士市教育委員会作成の図に多賀城例を出典文献より再トレースの上引用
- 第 66 図、第 67 図、第 68 図、第 69 図 - 2・3、第 70 図：出典文献より引用して作成 ただし、漣川瓠蘆古墳例は写真トレース
- 第 69 図 - 1：出典文献より線画トレース
- 第 71 図：高田健一氏より提供の図をトリミングの上引用
- 第 72 図：出典文献より引用して作成